

81年ぶりにご開帳された伽藍金堂の本尊薬師如来（高村光雲作）

震宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第115号

平成27年7月1日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

公益財団法人高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話0736-56-2029

URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

■ 休館日	年末年始のみ	■ 拝観料	大人 6000円
	5月1日～10月31日		高・大学生 3500円
■ 開館時間	8時30分～17時30分	■ 専用駐車場あり	小・中学生 2500円
	11月1日～4月30日		高野町に住居票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。
	8時30分～17時00分		

第36回高野山大寶蔵展

「高野山の名宝」
—高野山内寺院所蔵名品展—
7月11日（土）～9月27日（日）

第115号 目次

第36回高野山大寶蔵展のご案内	2～3
収蔵品の紹介89	4
高野山の古建築第十九回	5
高野山の考古学（七）	6～7
賢瓶に納入されている五薬と鬼との関係（その一）	8～9
高野山の文書（五）	10
高野山霊宝館からのご案内	11
霊宝館の庭園	12

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！ ホームページ割引券もご利用ください

第36回高野山大宝蔵展

「高野山の名宝—高野山内寺院所蔵名品展」

期間 平成27年7月11日(土)～9月27日(日)

前期 平成27年7月11日(土)～8月17日(月)
後期 平成27年8月22日(土)～9月27日(日)



高野山開創千二百年記念特別展示 重文 孔雀明王像 (快慶作)



重文 紅玻璃阿弥陀像



国宝 阿弥陀聖衆來迎図

高野山にはかつて一〇〇〇ヶ寺を越える寺院がありました。歴史の移り変わりの中、紆余曲折を経て離合集散し、現在は金剛峯寺境内地に一一七ヶ寺の寺院（これらは「塔頭寺院」、あるいは「子院」と呼ばれます）が存在し、弘法大師の法灯を今に伝えています。

本展では塔頭寺院の所蔵品を中心として、高野山の歴史・文化を象徴する名品の数々を展示します。今年、開創千二百年を迎えた高野山。その魅力の一端を、文化財を通じて是非感じてみてください。

主な展小品

彫刻

- 重文 孔雀明王像 (快慶作) 金剛峯寺
 - 重文 四天王立像 (快慶作) 金剛峯寺
 - 重文 執金剛神立像 (快慶作) 金剛峯寺
 - 重文 毘沙門天立像 (胎内仏) 金剛峯寺
 - 重文 釈迦如来及諸尊像 (枕本尊) 普門院
 - 重文 十一面観音立像 宝亀院
 - 重文 文殊菩薩及使者像 遍明院
 - 重文 仏頭 (高村光雲作) 金剛峯寺
 - 狩場明神像 (加藤景雲作) 金剛峯寺
- 「六波羅蜜」イベント共催展示 (9月19日～27日)

絵画

- 国宝 阿弥陀聖衆來迎図 有志八幡講 (後期)
- 重文 阿弥陀浄土曼荼羅図 西禅院 (前期)
- 重文 紅玻璃阿弥陀像 正智院 (前期)
- 重文 浅井久政像 持明院 (前期)

特別展示

期間 平成27年7月11日(土)～8月17日(月)



浅井久政像

浅井長政像

浅井長政夫人像 (お市の方)

平成25年度から平成26年度にかけての2ヶ年におたる保存修理を終えました、重文 浅井久政像、同浅井長政像、同 浅井長政夫人像(持明院)を特別展示いたします。



高野山壇上寺中絵図



重文 南保又二郎納骨遺品 (金銅宝篋印塔)



重文 紙胎花蝶蒔絵念珠箱 附 念珠

「六波羅蜜」イベントにて特別展示

9月19日(土)～27日(日)

伽藍金堂の本尊 薬師如来の頭部の試作品とされる高村光雲作の仏頭を展示します。



- 重文 浅井長政像 持明院(前期)
- 重文 浅井長政夫人像(お市の方) 持明院(前期)
- 重文 八宗論大日如来像 善集院(前期)
- 重文 八字文殊曼荼羅図 正智院(後期)
- 重文 両頭愛染曼荼羅図 金剛峯寺(後期)
- 重文 当麻曼荼羅縁起 清浄心院(後期)
- 重文 九品曼荼羅図 清浄心院(後期)
- 重文 武田信玄像 成慶院(後期)
- 重文 武田勝頼妻子像 持明院(後期)
- 重文 長尾景虎(上杉謙信)像 清浄心院(後期)
- 重文 高野山壇上寺中絵図 金剛峯寺
- 重文 山越阿弥陀如来像 西禅院
- 重文 仏眼曼荼羅図 桜池院
- 重文 蓮華形柄香炉 竜光院
- 重文 金銅金剛盤 巴陵院
- 重文 紙胎花蝶蒔絵念珠箱 附 念珠 金剛峯寺
- 重文 金銅仏具(五鈷杵・三鈷杵・独鈷杵) 金剛峯寺
- 重文 南保又二郎納骨遺品(金銅宝篋印塔) 金剛峯寺
- 重文 高野山奥之院出土品 金剛峯寺
- 書跡
 - 重文 金剛峯寺根本縁起 金剛峯寺(前期)
 - 重文 町石建立供養願文 金剛峯寺(前期)
 - 重文 紺紙金泥般若心経(靈元天皇宸翰) 金剛峯寺(前期)
 - 重文 聖観音造立願文 金剛峯寺(後期)
 - 重文 紺紙金字一切経(荒川経) 金剛峯寺(期間中展示替あり)
- 重文 仏頂尊勝陀羅尼経 正智院(後期)

※期間中、展示替えを行います。
※文化財の保存上、展示品が変わる場合があります。

収蔵品の紹介 89

狩場明神立像 一 軀

加藤景雲 作 昭和11年 (1936)

金剛峯寺蔵 木造 像高104.0cm



像底銘：「高野山ニ狩場明神々像ノナキヲ知り是レヲ遺憾ニ思フノ事久シ 具一族菩提ノ念信モ合セ得テ茲ニ此ノ神像ヲ謹刻シテ納ムルノ志□「福知(智)院主靜盛師(靜盛應師か)及ヒ靈寶館主事ノ堀田真快師ニ計リ兩師本山ノ幹部ニ交渉ノサル其快諾ヲ得」茲ニ是ヲ換作スノ昭和十一年十一月古辰ノ瑞光洞加藤景雲識」

本像は昨年、伽藍西塔から靈宝館に収蔵された、狩場明神と白犬・黒犬の像です。密教の教えを広めるため、修禪の道場をつくるのにふさわしい場所を探し求めていた弘法大師空海が、大和国宇智郡(現在の奈良県五條市付近)で出会った狩人に導かれて高野山を開きました。この狩人は丹生明神と共に高野の地を守護する、狩場明神(別名高野明神)が姿を変えてあらわれたのだと

いわれています。本像はその、獵師姿の狩場明神で、右手は上を指すかのようなかたちで左手に弓を持ち、左足を少し前に出す姿にあらわされ、素地のままの表面には鑿跡がのこります。足元の二匹の犬には彩色が施され、細かい彫りで毛並みが表現されています。厨子に納められていたため、彩色はよく残っています。作者の加藤景雲(一八七五〜一九四三)は島根県出身の彫刻家で、近

代日本を代表する彫刻家・仏師である高村光雲(一八五二〜一九三四)の弟子として五年間修行し、独立後も助手として光雲の作品制作に関わってきた人物です。今年春の高野山開創一二〇〇年記念大法会期間に初めて御開帳された、金堂の本尊・薬師如来(阿闍如来)は昭和七年(一九三二)に光雲によって造立されましたが、高齢の光雲の助手として景雲も制作に携わり、材となる檜の選定や、金堂へ本尊を安置する際に高野山へ来たようです。そういった折に高野山に狩場明神像が無い事を知った景雲が制作し、当時の福智院主である静盛應師と靈宝館主事堀田真快師を介して奉納したのが本像です。金堂本尊造立時や、その後の光雲一門との交流を示す、貴重な作品です。以前は伽藍山王院に安置されていましたが、のちに西塔へと移されました。(福形)

高村光雲作 金堂御本尊 特別公開

公開期間

10月1日(木)〜11月1日(日)

※10月1日〜3日までは、結縁灌頂開催のため、入壇制限があります。

連載

高野山の古建築

第十九回 金剛峯寺壇上伽藍金堂

鳴海 祥博



鎌倉時代の壇上伽藍を描いた絵図
鎌倉時代の伽藍の様子を描いた図が江戸時代に模写され、高野山に伝わる古文書「又統宝簡集」に収められている。



昭和9年再建の金堂 鎌倉時代の絵図では、金堂の屋根は檜皮葺のようだが、再建の金堂は銅瓦葺きで、防火を意識したようである。



金堂の正面側面 昭和の再建に当たって、正面の柱間の数が、7間から9間に拡張されたが、全体のイメージは鎌倉時代の絵図を彷彿とさせる。



金堂の隅の見上げ 軒廻りや組物、そして柱などは木造で、平安時代初めの様式で造られているが、その内部には鉄筋コンクリート造の構造体が隠されている。

今年（弘仁七年（八一六））に高野山が開かれて一千二百年の記念の年です。お大師さまが未開の深山幽谷の地に分け入り、最初に堂塔を建てたのが壇上伽藍の一郭でした。江戸時代に編纂された『高野春秋』という書物には、弘仁十年（八一九）に金堂が落慶したと記されています。高野山開創頃の様子は明らかではありませんが、記録から想像すると、金堂や大塔、中門、鐘楼などの堂塔が、数十年前から百年近い時をかけて整備されていったようです。しかも建物の規模は現在見るような破格の大きさで、壮大な構想の基に計画された大伽藍は、一朝一夕に出来上がるものではなかったと思います。草創期の大伽藍は、承暦五年（九九四）の大塔への落雷で焼失してしまいます。その後堂塔伽藍は復興するので

すが、高野山の歴史は再々々の落雷炎上、再建の繰り返しで、再建までに百年余を要した事も一度や二度ではありません。伽藍を維持し法灯を守ることに、それが高野山の歴史だったとも思えます。

ように映るでしょうか。堂々とした伝統的な木造建築、と見えるに違いありません。この金堂、実は「鉄骨鉄筋コンクリート造建築」なのです。燃えないコンクリート造の骨格を、伝統的な様式の木造の建築部材で覆った、見せかけの木造建築なのです。

壇上伽藍金堂は、六度の火災の末に再建された七代目の建物です。六代目の金堂は昭和元年（一九二六）十二月二十六日に失火で焼失しました。前日に崩御された大正天皇の追悼のため、夜通し灯された燈明が原因だったと言われています。当時高野山では、昭和九年の弘法大師一千百年御遠忌に向けて大塔再建の計画が進められていました。大塔は天保十四年（一八四三）の焼失から八〇年以上も再建が果たされていなかったのです。その矢先の金堂の罹災でした。大塔とともに、急遽金堂の再建に迫られた高野山の意向は「伝統様式を受け継ぐ燃えない建築」でした。

その難題に答えて再建されたのが現在の金堂です。皆さんの目には、この金堂はどの造の建築部材で覆った、見せかけの木造建築なのですか。この難題に答えたのは二人の大学教授でした。一人はコンクリート造の骨格を担当した近代建築の権威武田五一博士。もう一人は外装を担当した天沼俊一博士で、日本建築の様式史の第一人者でした。平安時代の初期、高野山草創頃の建築様式を基本としながら、所々に天沼博士の創作デザインを織り交ぜた、実に素晴らしい作品だと思えます。ただ、天沼博士自身は、骨格が鉄筋コンクリートなのでデザインの上では自由がきかず「外観甚だ不満足」だったと著書の中で述べています。「二度と火災を被りたくない」度重なる火災を経験した高野山の切実な願いが、コンクリート造と、全く異質な伝統木造の融合という、希有の建築を実現させたのです。

納骨信仰の展開⑤

公益財団法人 元興寺文化財研究所

狭川 真一

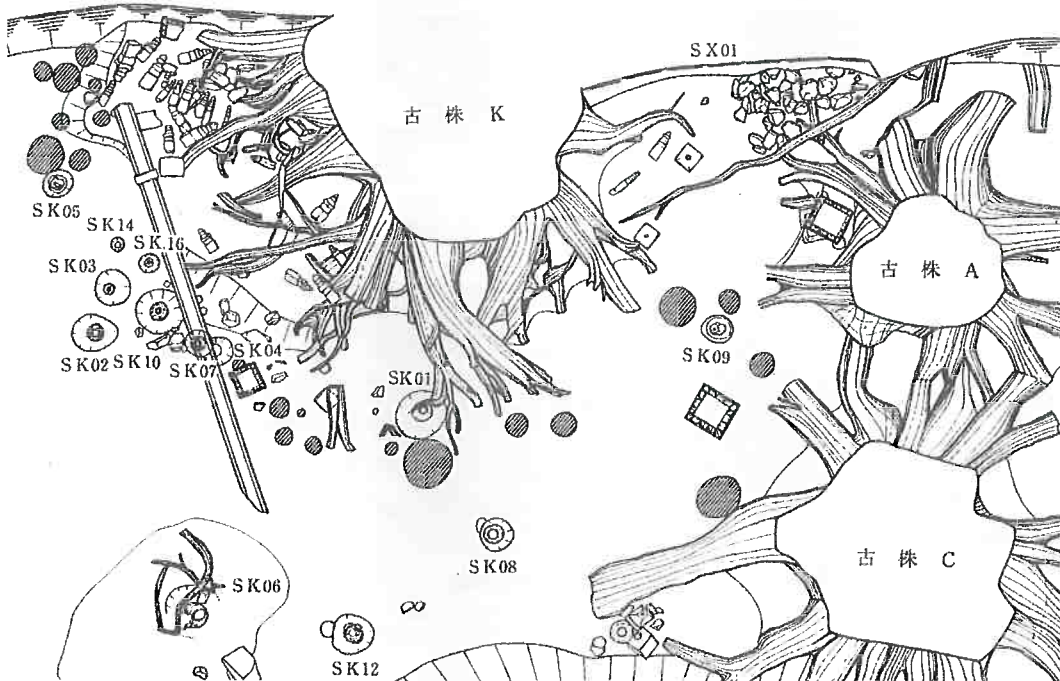


図1 第二灯籠堂建設地で見つかった火葬骨埋納ビット (斜線を入れた部分)

十四世紀中頃、つまり南北朝時代頃を境にして、納骨信仰の形態が変化することは前回述べました。それは、納骨容器が小型化していくこと、納骨器に使用する素材の種類が増えていること、つまり金属製のものから土師器のような庶民層が利用する土器まで含まれていることなどです。このことから、納骨する人々の社会的階層が広がったのではないかと考えました。

では、続く室町時代にはどのように変化したのでしょうか。石塔の形態と納骨遺構から考えてみましょう。

石塔の変化

十四世紀中頃までの石造五輪塔では、水輪と呼ばれる塔の中心の球体部分に納骨されていました。室町時代の五輪塔には納骨する穴が存在

しなくなりました。外観はこれまでの五輪塔と特別な変化はありません。しかし、五輪塔を組み立てる構造を観察すると、変化がよく分かります。高野山にある室町時代の五輪塔では、水輪の上下に低い柄が飛び出していて、下の地輪と上の火輪のそれぞれの中央に、その柄を受ける浅い柄穴が開けられています。基礎となる地輪にも納骨できるような穴はなく、石塔の中へ納骨するという形式、つまり塔そのものを容器とするという考え方は、急速に採用されなくなることがわかります(図3)。

この事実は、容器の変遷とあわせて、納骨信仰にとって大きな歴史的転換があったことを意味していると思います。では、どこに骨を埋葬したのでしょうか。そのヒントの一つは、わずかに発見されている火葬骨を埋納した浅い穴にあります。

納骨の遺構

室町時代だと特定できる納骨遺構はまだ確認できていませんが、遺構のあり方から推測して可能性が高いのは、第二灯籠堂建設に伴う調査で確認された、直径15〜35cm、深さはきわめて浅く数cm程度で、納骨用の特別な容器を持たない素掘りの穴で

納骨の遺構



図3 中世後期の水輪上部の様子・納骨穴がなくなっている (奥之院所在)

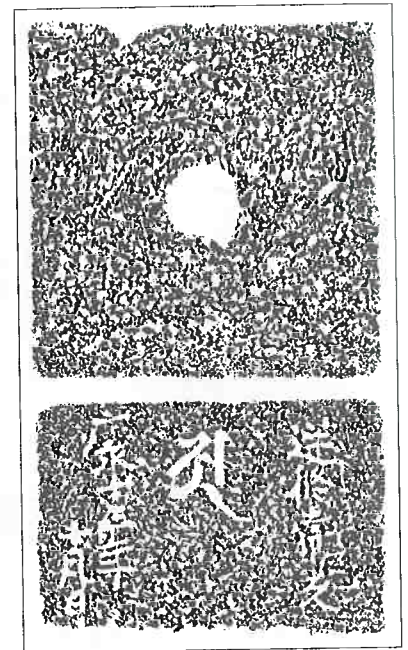


図2 応永銘の五輪塔地輪拓影

す。その中に火葬骨を含んだ灰や炭がぎっしりと詰まっていますので、火葬骨埋納ピットと呼んでいます(図1)。

一部の穴の上には石塔の台座が乗っているものがあり、上部に石塔を建立したことがうかがわれます。また付近から出土した五輪塔に「応永十三年(一四〇六)」の年号がみ

集団が造営した石塔一覧

年号	西暦	銘文記載部位	銘文
興国四年	1343	五輪塔地輪	「河内國錦部郡足万庄住人等廿余人」
正平十二年	1357	五輪塔地輪	「河内國錦郡一結衆等」
正平十八年	1363	五輪塔地輪	「一結衆十三人」
応永二年	1395	五輪塔地輪	「一結諸衆」
応永三年	1396	五輪塔地輪	「一結衆」
文安四年	1447	五輪塔地輪	「結衆等廿八人」

『紀伊国金石文集成』より抜粋

られましたので、概ねこの頃の遺構だろうと推定されています。

この穴は、ほとんどが一つ一つ単独で作られています。図1の左上に見えるような、複数の穴が集中しているものもあります。この場合、複数の穴に納められた人たちには何らかの関係を推定できそうです。この背景を探る手立てとして、奥之院

石塔の銘文を読む

に残る石塔の銘文に注目してみましよう。

室町時代の五輪塔に刻まれた銘文は、一般的には中央に法名(戒名)、左右に没年月日を振り分けて書く(刻む)というものです。これは個人の供養に伴うものですが、表にまとめたように、集団で一基の石塔を建立しているものもあるようです。

その構成人数は十三人、二十八人と具体的にわかるものもあります。銘文だけでは納骨目的で造塔を行ったかどうかは不明ですが、火葬骨埋納ピットが大小八基ほど集中して存在する姿は、こうした講衆による集団での納骨をイメージできるのではないのでしょうか。

室町時代には、地下に少量の遺骨を埋納し、その上または近くに石塔を建立するという納骨形式の存在したことがうかがえました。しかし、調査で確認できたのはわずかな数であり、これが広範囲に広がっていたとしても、おそらくその数は石塔のほうがるかに多いように感じられるです。そのあたりのことは、次回にあらためて探ってみましょう。

賢瓶に納入されている五薬と鬼との関係 (その1)

富山大学和漢医薬学総合研究所民族薬物資料館

伏見 裕利

平成二十年に行われた重要文化財高野山金剛三昧院客殿の発掘調査の時に、賢瓶が一つ出土している(写真1)。この賢瓶は本体が青銅製、フタが鉄製で、高さは一二cmあり、絹布で包まれ、四方を五色の紐で十

文字に縛ってあった。この賢瓶に関しては、菅原の研究から、形式的に見て十六世紀前半から中頃に所属するものであると推定されている。また京都市埋蔵文化財研究所の研究から、賢瓶の中には、五寶として、金

箔、銀箔、水晶、玻璃(ガラス)、真珠が、また五穀として、稲、小麦、大麦、小豆、稗が存在し、さらに五香として、沈香や白檀の他、鬱金が存在することが、明らかとなっている。一方これらの他に、賢瓶中から

「とある。さらに「四方には五色の玉と五穀粥」を埋めている。地鎮法に用いる賢瓶には五寶、五穀、五香、五薬等が納入されており、五薬としては、「覚禅鈔」に「赤箭、人參、石菖蒲、茯苓、牛黄」の五種類の生薬を用いることが記載されている。

写真1 賢瓶(開封時)



写真2 賢瓶中に存在した膜状の物体(不明品)



細長く薄い膜状の物体が多数見つかった(写真2)。今回、京都市埋蔵文化財研究所及び香老舗松栄堂からの依頼を受けて、この膜状の物体が何に由来するかを明らかにすると共に、賢瓶の中について考察した。

『覚禅鈔』の地鎮鎮壇法には、地鎮法として「金銅の賢瓶一口に、五寶等を入れ、蓋で覆い、五色の糸を以って之を結ぶ。然る後に地に之を埋め

今回賢瓶中から見つかった、長さ一〜二cm程度の細長く薄い膜状の物体が何であるか、民族薬物資料館に収蔵している生薬標本との比較検討を行なった。その結果、細長く薄い膜状の物体は、生薬「天麻」に付随している鱗片葉であると推定された(写真3)。生薬「天麻」は「赤箭」の別名で、ラン科のオニノヤガラという植物の根茎に由来する。オニノヤガラは、高山帯の山の木陰に生える多年生の無葉ランの一種である。地下に長さ一〇cm程の楕円体状の根茎をつくり、ナラタケの菌糸と共生している。地上の茎は円柱状で直立し高さ四〇〜一〇〇cmにもなり、一



写真3 生薬「天麻」



写真4 オニノヤガラの鱗片葉

見、矢のような形をしている。茎には鱗片葉があり膜質で茎を抱くように数個存在している(写真4)。この鱗片葉を実体顕微鏡下で観察すると、ひだ状に折れ曲がった構造をしており、ところどころ筋状に隆起している部分が確認された。得られた外部形態的特徴は、賢瓶中の膜状の物体と一致した。さらに賢瓶中のものは刃物の様なもので、細長く切断されていることが明らかとなった。

次に、和漢薬として使用する個々の生薬について、名前や薬効、別名、産地等が書かれている歴代の本草書の記載内容を検討することにより、賢瓶の中に「五葉」を用いる意義について考察した。「五葉」である「天麻、石菖蒲、牛黄、人參、茯苓」の各生薬は、高貴薬に分類されるものが多く、現在の漢方治療の中でもしばしば使用されている。各生薬の形態や薬効、別名などの記載に関しては、約二千年前の漢代のころに記された『神農本草経』にはじまり、『經史証類大観本草』には、歴代の本草書の記載が続けて記載されている。これら五種類の生薬の記載内容を比較検討した結果、五葉とされる各種生薬は、「鬼」という言葉がキーワードとなることが明らかとなった。

薬物で、「牛黄は味が苦、性が平。驚癇、寒熱、熱盛狂瘈を主る。邪を除き、鬼を逐う」とあり、ウシの胆嚢もしくは胆管中に病的に生じた結石である。人參は、『神農本草経』に収載された薬物で、「人參は味が甘、性が微寒。五臓を補い、精神を安定させ、魂魄を定め、驚いた時の動悸を止め、邪気を除き、目を明らかにし、心を開いて智慧を増すことを主る。久しく服用すれば、身が軽くなり年が延びる。別名として、人衛、鬼蓋がある」と記されており、ウコギ科のオタネニンジンの根に由来する。茯苓は、『神農本草経』に

た。五葉の中で、赤箭(天麻)は、『神農本草経』(漢代)に収載された薬物で、「赤箭は味が辛、性は温。鬼精の物や蠱毒、悪気を殺すことを主る」と記載されている。また石菖蒲は、『薬性論』(六二七―六四九年)に、「菖蒲は君薬で、味が苦、辛で無毒。風湿、麻痺、耳鳴り、頭風、涙を下し、鬼の気を治す」とあり、サトイモ科のショウブの根茎に由来する。牛黄は、『神農本草経』に収載された

収載された薬物で、「茯苓は味が甘、性が平。(中略)久しく服すれば魂を安んじ、神を養い、飢えず延年する。」と記されており、サルノコシカケ科のマツホドの菌核に由来する。また茯苓は『名医別録』(五〇二―五三六年)には、「氣力を益し、神を保ち、中を守る。別名は茯苓、その根を抱くものを茯苓と名づける。茯苓は性が平。不祥を避けることを主り、風眩、風虚、五勞、口乾を療じ、驚悸し、多く悲怒し、善く忘れるのを止める。心を開いて智慧を益し、魂魄を安んじ、精神を養う」と記載されている。

このように『覚禪鈔』に記載されている五葉は、各種本草書の記載内容で、「鬼」そして「神」という言葉に関係していた。このことから賢瓶に使用する「五葉」は、賢瓶中に封じ込めた、鬼に用いた薬であったのではないかと考えるに至った。

【参考文献】

- 菅原正明 『重要文化財高野山金剛三昧院客殿の発掘調査』 元和歌山県立博物館副館長
- 竜子正彦 『高野山金剛三昧院出土賢瓶の分析報告』 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

高野山の文書 (五)

重要文化財 浅井長政像 (持明院) の賛について



重文 浅井長政像

高野山には古文書類が多く現存しますが、文字史料は文書や日記に限るものではありません。今回紹介するものは、肖像画の「賛」と呼ばれるものです。日本では、古くから天皇などを中心に、肖像画が描かれていた記録があります。鎌倉時代には禅宗の伝来にもない、師僧から弟子に贈る頂相(肖像画)が広まりました。頂相は、師僧から伝法されたことの証明である他に、亡き師僧の仏事に掛けて供養することにも使われました。室町時代以降、禅宗に帰

依した武将やその夫人像も描かれるようになり、江戸時代には、文人や芸術家の肖像画も描かれました。賛は、肖像画の上部に書かれ、文章や漢詩、和歌などが書かれます。基本的に禅宗の高僧が書くことが多いです。武将の肖像画の賛は長いものが多く、その一生や戦歴、教養の高さなどを賛美する内容になります。そのため、その内容を鵜呑みにすることは危険な史料でもあります。浅井長政像の上部に書かれている賛は、次のとおりです。

威気生平吞八荒更參
禅将本無藏臨兵曾會
趙州旨露刃光寒三尺
霜

前備州太守天英宗清
大居士先是天正元癸
酉九月朔擢于兵銃薨
矣後十七年有人命工
書其肖像就予求賛詞
不獲默止塞厥責焉
天正歲舍乙丑臘月吉辰
前南禅鍊浦叟宗純(朱印 鍊浦)

前半は、漢詩で七言絶句と呼ばれる形式です。その内容は、長政の威风が国の隅々にまで行き渡っていたこと、禅の修行を行っており、戦の際に中国の禅僧、趙州從諗(七七八(八九七)の教えに会って、その教えを究めたことが書かれています。後半は、著賛(賛を書くこと)の経緯が書かれています。前備前守天英宗清(浅井長政)が天正元年(一五七三)に戦死したこと、その

十七年後に「誰か」が画工に命じて肖像を描かせたこと、その肖像画の著賛を、前の南禅寺長老鍊浦宗純が依頼されて承諾したこと、天正十七年に著賛したことが書かれています。このことから、十七回忌に際し、「誰か」が長政像を作らせたと考えられます。仏事に用いられた頂相の性質を色濃く残しているといえるでしょう。また、「誰か」は長政の娘で、豊臣秀吉の側室である淀殿の可能性が高いとされています。

持明院には、浅井長政夫人像(重要文化財)も伝わっています。二幅は一对のものとして持明院に納められました。夫人像には、長政像のような賛がありませんが、長政像の賛によって、同時期の天正十七年頃に描かれたということが分かります。賛は、肖像画の一部であると同時に、「書」として一つの史料であるともいえるでしょう。

(研谷)

高野山霊宝館からのご案内

各種イベント報告

◎高野山開創千二百年記念展
「初公開！高野山の御神宝」
(3月21日から7月5日まで開催)

◎開創法会期間限定特別公開
「高野山三大秘宝と快慶作孔雀明王像」
(4月2日から5月21日まで開催)

4月2日から5月21日にかけて執り行われました「高野山開創法会千二百年記念大法会」に際し、右記



本館紫雲殿で国宝八大童子像をご覧になられる秋篠宮文仁殿下と紀子妃殿下

の特別公開と記念展を開催しましたところ、約12万人の来館者がありました。来館者は、弘法大師由来の数々の文化財に触れ、往時に思いを馳せておられました。

また、5月20日には、秋篠宮文仁殿下・紀子妃殿下が来館され、高野山千二百年の歴史を伝える様々な文化財をご覧になりました。

◎長谷川智弘展 「結びの世界「みやび」を開催



長谷川智弘展開催の様子

霊宝館「迎賓館」において、作者が長年製作されてこられた作品展を開催いたしました。期間中、多くの来場者があり、長谷川師の解説を聞

きながらいろいろとどりの結びの世界に魅了された様子でした。

◎関西文化の日事業に参加 (5月5日(火)・祝)

事業に継続参加し、子供の日の5月5日に、小中学生の無料拝観を実施しましたところ、多くの子供たちが来館者し、普段目にする事の少ない貴重な文化財に目を輝かせていました。

◎文化財特別公開事業 ◎重文 徳川家霊台特別公開 (5月6日(土)～17日(日))

開創法会期間に特別公開を行いました。9日間で約1万人の拝観者が



徳川家霊台特別公開の様子

お越しになりました。拝観者は、江戸時代の豪華絢爛で精巧な作りに魅了されていました。

◎文化財特別公開事業

◎国宝・不動堂を公開

〔日時〕 8月28日(金)～30日(日)

午前9時～午後4時30分

〔場所〕 不動堂(壇上伽藍)

〔拝観料〕 無料 事前申込不要

◎徳川家康公四百回忌記念 ◎重文 徳川家霊台特別公開

※但し、内部には入れません。

〔日時〕 10月31日(土)～11月8日(日)

午前9時～午後4時30分

〔場所〕 徳川家霊台
(家康霊屋・秀忠霊屋)

〔拝観料〕 200円(通常拝観料)

お問い合わせ先 **高野山霊宝館** TEL 0736-56-2029(代)

霊宝館の庭園

カツラ・桂・楓・おかつら

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

カツラはカツラ科・カツラ属の落葉高木です。現在は桂の字が当てられています。往時はクスノキ科の常緑高木・ニッケイやヤブニッケイに桂、カツラには楓の字が当てられ、どちらも、かつらと読(呼)んでいました。

元来、楓は和名をフウとしている。中国原産のマンサク科の落葉高木に当てられている漢字ですが、わが国ではカエデ科の仲間にも、この字が用いられています。

カツラに桂の字が当てられるよう



カツラの幹と葉枝



摩尼山 自然林内の桂

になったのは、樹幹が真直、樹冠は円錐形・長円錐形に整う「すつきりした木」という説があります。

この樹種は植栽すれば少々乾燥した所でも育ちますが、谷沿い、清水の流れる水辺などに自生し、株立ち

(一つの根株に数本から多数の幹が生じて成長すること)し、それぞれが大木となることの多い樹です。

別称には、おかつら(男桂・雄桂)、賀茂神社の大祭・葵祭にフタバアオイとともに葉枝が用いられることに

よる加茂桂(楓)、方言名には、み

ずのき(水の木)、特に広義の東日本では、こうのき(香の木)、おこのき(お香の木)、まつこうのき(抹香の木)、まつこ、などがあるそうです。

山形県鶴岡市の「到道博物館」からいただいた資料からは、合併前のこの地方の山村では、お盆(盂蘭盆)前に、この樹の葉を庭に敷いた筈に

拡げたり、かき廻したりして乾燥させものを粉にして抹香をつくり八月十三日から向こう一カ年の先祖の精霊に献ずる香とする(した)という

ことを知ることができません。

高野山では自生するものは多くありません。自生しているものうち、摩尼山自然林内の大樹、南海高野線の極楽橋駅から高野山駅に登るケールカーの軌道沿いの右側、清水の流れる水辺に株立ちし、谷を蓋って繁茂しているものをあげておきます。

植栽されているものでは、摩尼山の山裾の水辺の十六株は、現在は樹勢が、やや気になります。うまく育てば、観察林・学習林としても最適、極楽橋駅の改札口を出てすぐの不動谷川岸の一株は、この樹種の樹容の見本木、転軸山公園のものは株立ちということを知る見本となります。

カツラは春には夢も花弁も無い紅紫色の小さな雄花雌花をつけ、秋には黄葉しますが、初夏から夏に、比較的薄い団扇のような形をした葉をつけた葉枝が季節の風に応じてそよぎ時折、白い葉裏を見せる様は涼やかです。